

「荒井図書館」の有する意味

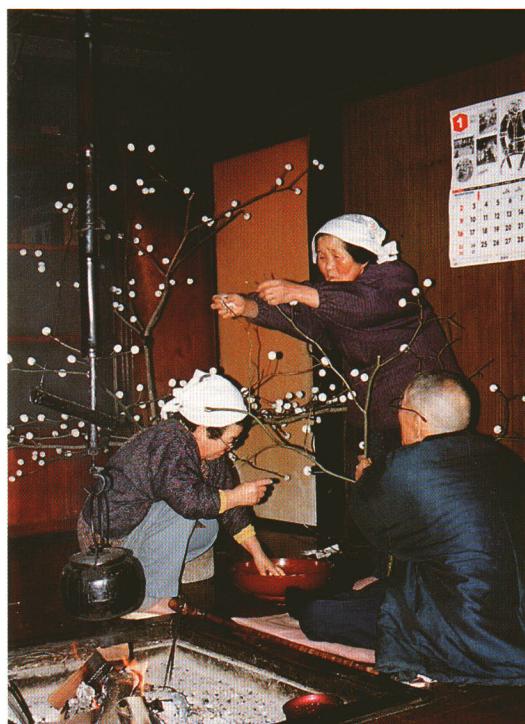
新鶴村の基幹産業は、昔も今も変わらず農業である。しかし、昭和二五年当時八五パーセントだった農業人口も平成になつてからは三〇パーセント台となり、深刻な後継者難の問題を抱えている。また、農業粗生産額も昭和五七年頃をピークに年々下降線をたどっている。国においても農村崩壊に対する危機感は高まっており、現在は、食糧・農業・農村基本問題調査会によつて、昭和三六年に制定された「農業基本法」を見直し「新農基法」を策定するための論議がなされている。

その中では、農業は単に食糧を生産するのみならず、洪水の防止、地下水の涵養^{かんよう}、都市住民の憩いの場の提供、生物や大気の保全など、さまざまな公益的機能を有することも話題となつてゐる。農水省の平成元年度の試算によると、水田だけでも約一二兆円分の効果があり、同年のコメ総産出額三兆二〇〇〇億円を大幅に上回つており、これが「農民は勇敢な国土防衛隊」とする根拠である。

しかし、それは農業が受動的に持つ一面に過ぎない。もつと能動的なもの、人間が人間たる積極的な意味合いが農業にはあるのではなかいか、といった論議も最近はよく耳にする。中高年者の帰農増加や、都市住民の約四〇パーセントが農村移住を希望していること、そしてグリーンツーリズムもまた、その論議の視野に入つてゐる。

確かに農村には、盆踊りや小正月といった年中行事、初冬の大根干しといった日常の生活景、田植えなどの作業景から醸し出される抒情的景観があり、それが疲弊した現代人に

潤いを与えることは想像がつく。だがおそらくキーワードは“文化としての農業”にあるのではないか。古典経済学の始祖アダム・スミスは、その著作『国富論』の中で、農業労働は広い範囲の知識、技能を必要として、しかも日々の創意工夫が成果となつてあらわれる、きわめて人間的な労働と述べてゐる。さらに、詩人・童話作家として有名な宮沢賢治の『農芸術概論』には、「農芸術とは宇宙感情の地人個性と通する具体的なる表現である／そは直觀



写真右——都会ではもうみられなくなった端午の節句の武者幟

写真左上——道祖神を祭る正月の火祭行事 サイノカミ（佐藤文夫氏提供）

写真左下——農村ならではの年中行事・正月の団子さし（佐藤文夫氏提供）